

ライブラリー情報

No.34 Library Information December 2008 愛知江南短期大学図書委員会 発行

目次

- カナダ—江南—そして私 / 伊藤 洋子
私の見たカナダ / 井原 俊輔
Joy Kogawa の小説『OBASAN(オバサン)』にみる日系カナダ人の足跡 / 大石文朗
Would you like to go to Canada to visit your sister? / John Armstrong
姉妹に会いにカナダへ来ませんか? (アームストロング先生のメッセージの要旨)

学生エッセイ

- | | | | |
|----------------|---|-------|-----------------|
| カナダ4ヶ月留学に参加して | / | 津田 菜月 | (現代キャリアコース 卒業生) |
| カナダ語学研修の思い出 | / | 大角 佳哉 | (国際教育コース2年) |
| カナダで体験したこと | / | 堀場 愛可 | (国際教育コース2年) |
| カナダと私 — 新しい出発へ | / | 弓削 春佳 | (国際教育コース2年) |

図書館ガイダンスアンケート

図書館の本と映像資料の紹介

映画 : 鑑賞者数ランキング 平成20年9月1日現在

カナダ --- 江南 --- そして私

図書館長・教養学科教授 伊藤洋子

ライブラリー情報2008年度号のテーマは「カナダと私」です。ご存じない方もいるかもしれませんが、愛知江南短大はカナダのブリティッシュ・コロンビア州にあるセルカークカレッジと姉妹校であり、20年にわたる緊密な交流があります。そんなわけで今回、このテーマにかかわりのある本学の教養学科の在校生・卒業生・教員そしてカナダの客員教員の方たちにそれぞれのカナダ経験を書いていただきました。日系カナダ人を描いた小説の紹介もあります。セルカークカレッジと江南短大の公的な関係についてはジョン・アームストロング先生が書いておられるので、私はこの際カナダとの不思議な縁(えにし)ないし因縁について、かなり個人的な話をさせていただくことにします。

話は育児のために私が高校教師を辞めた数十年前にさかのぼる。

長女がまだ赤ん坊だったころ、夫のポス・ドク(博士号取得後の研究)修行に同行した先がカナダのオンタリオ州にあるロンドンという大学町であった。1年という短い期間ではあったが、生活者として外国に暮らしたことが若い私にとって本当にエキサイティングで貴重な体験だったことは言うまでもない。

たくさんの布オムツをかかえての飛行機旅で、1歳半の娘が泣いて他の乗客に気兼ねしたこと、大学アパート(大学院学生と研究者用)の広さに驚きつつレンタル家具を町で探し回ったこと、到着早々娘が「風疹」になりホームドクターを急遽決めると言われてあわてたこと、日本ではまだ出回っていなかったグレープフルーツがふんだんに食べられてうれしかったこと、当時日本の助手の給料では手が出にくかった牛肉を大きなかたまりで買えて感激したこと、日本食が恋しくて小麦粉でうどんまで作ったこと、部屋の電話が鳴ると相手が誰か分からず、どんな分かりにくい英語が聞こえてくるかとおびえたこと、冬の雪道で車がスリップする中びくびくしながら買いものに出かけたことなど、ささいなことがいくらかでも思い出される。

しかし現地で多様な人々と出会ったことが、何といっても一番の思い出である。夫の研究室のボスはニュージーランド人、研究者仲間はイギリス人、インド人、フランス人などでカナダ人は少数派であったし、大学アパートの隣人たちは中国、韓国、アフリカなど国籍もさまざまだった。研究室初の日本人だった夫はコーヒー・ブレイクで飛び交う英語に必死になって耳を傾けるうちに英語がうまくなったが、私は育児で動きがとれず、せいぜい近所の奥さんたちとの井戸端会議に精を出し、現地日本人ネットワークに入れてもらい、夫の同僚たちとのパーティーで会話に参加するくらいしかできなかった。

何はなくとも人を招いておしゃべりする欧米人の気軽さは見習わなければと思ったし、珍しい食材が手に入ったら分け合い、料理を持ち寄ってよく集まったが、長時間になると英語を聞くのに疲れて、生理的な拒否反応が起こった。中国人のカップルは平気で夫婦喧嘩を公開することに驚いたり、韓国の女性からキムチのつけ方を習ったり、日本ではアジアの人との付き合いがほとんどなかったのに、実にいろいろな発見があった。

時を経て江南短大に赴任するまで、ふたたびカナダと係わり合いをもつことになるとは夢にも思わなかった。先のことはわからないものである。

私は16年前、セルカークの客員教員・ジョン・アームストロング先生(現在2度目の江南滞在中)と入れ替わるように江南短大に赴任した。以来夏期語学研修の引率教員として16年間で7回カナダに行き、10年以上にわたって隔年ごとに教養学科のカナダ4か月留学のお世話をしている。本当にカナダとは切っても切れない「縁」を感じるのである。

たくさんの江南学生の研修や留学のお世話をしつつ引率もし、セルカークのスタッフたちと連絡をとりあい、現地で公私にわたるつきあいをする中で、私自身もたくさんのことを学び、カナダならではのダイナミックな体験もした。もちろん頻繁な引率や時差の大きいカナダとのやりとりなど負担に感じなかったと言えは嘘になるが、中年すぎても次々と新しい課題に立ち向かい、未知の人々とつきあう境遇に置かれたことは、**exciting** かつ **challenging** であったというべきであろう。

何度も同じ地域に行き、同じ人々と会うことは、旅行のような一過性の滞在経験に比べてはるかに豊かなものをもたらす。若いとき暮らした **London, Ontario** と長い年月を経てかかわりをもつようになった **Nelson, B.C.** というカナダの2つの地域を通して、大げさに言えば私は人間の多様性と普遍性についてなにがしか学んだような気がしている。

毎年客員教員が江南に赴任するようになり、セルカークカレッジと江南短大がいわば普段着のつきあいをするようになる中で、ブリティッシュ・コロンビア州の片隅にある小さな町グランドフォーク

ス、ネルソン、キャッスルガーとそこに住む人々---つまり姉妹校セルカークカレッジの関係者とホストファミリーを中心とした人々---の生活や人生が次第に身近なものになってきたのである。

カナダはアメリカと似ているとよく言われる。たしかに広大な国土と資源に恵まれ、アメリカの影響をもろに受けているが、私の印象ではアメリカよりもっとおおらかで平和を愛し、自然や家族を大切に、アメリカ文化と距離をおきたいと考える人が多いように思われる。近年アメリカを嫌ってカナダに移住してくる人が増えたのもうなずける気がする。

またカナダでは、資源や自然を大切にしたり動物を保護するというモットーが、お題目ではなく日常的な行動として人々に定着しているように感じる。地に足がついた彼らの素朴で質素な生活態度は、現在多くの日本人が失いつつあるものであろう。英語とフランス語を公用語とするカナダの異文化に対する懐の深さも、見習うべきもののひとつだと思う。

シェイクスピア劇に入れあげ、ヨーロッパ文化の伝統になじんでいた私にとって、カナダの田舎(失礼!)は最初いささか退屈すぎるような気がした。今はしかし、カナダとのめぐり合わせの不思議さを思い、出会った人々との縁を感謝せずにはいられない。

私の見たカナダ

教養学科学科長 井原俊輔

情報理論の国際会議出席のために来ているカナダ最大の都市トロントでこの原稿を書いています。2年前には本学の語学研修の引率で学生の皆さんと一緒にネルソンに滞在しました。実は、今回が5回目のカナダ訪問で、最初は、1975年から76年にかけて1年間首都オタワのカールトン大学で研究生を送りました。最初の滞在以来、カナダのことは大変気に入っています。

国土の広大なカナダですが、その第一の印象は、おおらかなこと、あるいはスケールが大きいうことです。悪くいえば、大雑把ということですが……。結果的に、社会全体に余裕が感じられます。閉塞感の漂う昨今の日本とは対照的です。

今回の旅でも、空港バスの運転手が乗客と冗談まじり(多分?)に話をしながらバスを走らせていました。車内は和やかな空気が流れましたが、日本なら服務規律違反といわれそうな光景でした。もっとも、この運転手には私のホテルへの経路をショートカットされてしまい、ホテルから500メートル離れたところで降ろされてしまいました。私の発音が悪くて、乗車するときに告げたホテルの名前が間違っただけで伝わっていたようでした。

本学の学生がセルカークカレッジに留学する場合、現地でホームステイします。住宅事情に違いはあるものの、日本ではホームステイする留学生を受入れようとする、言葉の問題、食物の問題、習慣の違い、などなど心配なことがいっぱいあって、つい受入れを躊躇する家庭が多いのが実情といえます。この点、ありがたいことに、カナダではあまり細かなことは気にせずおおらかに留学生を受入れてくれているように思います。

カナダの隣国アメリカは政治的にも経済的にも強国で、しかも何でも世界一を目指し、自国の制度が世界一と信じて他国にも強制しようとしている国です。したがって、カナダは隣国アメリカの影響

を受けざるを得ません。しかし、カナダはアメリカのいうなりになるのではなく、一步距離において、独自性を保とうとしているようです。多くのカナダの人が「なにも無理して世界一でなくてもいいよ」とおおらかに構えているように感じます。このことから余裕が生まれてくるような気がします。ひるがえって、常に「自分こそが一番」を主張している日本、中国、韓国がお互いに「無理して一番でなくとも」という気分で付き合うことができれば、三国そろってもっと幸せになれそうに思います。

最後に、カナダの自然について述べておきましょう。ナイヤガラ滝に象徴されるようにカナダの自然の雄大さはいまでもなく、カナダならではのスケールの大きな自然を味わうことができます。私が滞在したオタワの冬は寒く零下30度の世界も体験しました。オタワには街の中央を横切るリド一運河があります。船で物を運搬することはもうありませんが、現在では、世界遺産に登録され、市民の憩いの場となっています。この運河は冬ともなると全面凍結し天然のスケートリンクとなります。一方の水門が国会議事堂の横にあり、もう一方の水門が私の滞在したカールトン大学の横にあり、この間8キロという世界一長いスケートリンクです。3回ほど8キロの道のりをスケートで“通学”しました。しかも、零下20度近い寒さの中を2時間近くの時間をかけて。

おおらかさ、大雑把の一方で、自分の行動の責任は自分で取るという「自己責任」が強調されるのもカナダ社会の特徴だと思います。改革、改善と称して細かい規則を作り、いったん問題が起こると国が悪い、学校が悪い、教師が悪い、と人のせいばかりにする社会を思うと、雑ではあるが自己責任をはっきりさせるカナダ流の方が私の性分には合っています。

このような私の目から見ると、長年にわたる本学とカナダのセルカークカレッジとの交流の積み重ねは江南短大にとって貴重な財産です。これからも一人でも多くの学生がセルカークカレッジを訪問し、雄大な自然に触れ、おおらかで大雑把で余裕のある社会を味わってほしいものです。

Joy Kogawa の小説『OBASAN(オバサン)』にみる日系カナダ人の足跡

教養学科教授 大石文朗

Joy Kogawa はカナダ首相の秘書を務めた後、自らの経験をもとに第二次世界大戦中の日系カナダ人の悲劇を描いた小説『OBASAN (オバサン) , Lester & Orpen Dennys Ltd.』を1981年に発表しました(日本語の訳本は、長岡沙里訳『失われた祖国』中公文庫、1998年があります)。この作品は、カナダ文学賞、全米図書賞など、他にも多くの賞を受賞し、その後の日系カナダ人の社会的な地位向上に対して大きな影響を与えました。今でもカナダの多くの大学において、テキストあるいは副読本として採用されているばかりでなく、日系カナダ人関連の書籍の中では、未だに多くの人々に広く読まれている小説です。

物語には日系一世のアヤおばさんと日系二世のエミリーおばさんという、主人公ナオミの人生に大きな影響を与える二人のおばさんが登場します。この二人のおばさんは「静」と「動」のように全く対照的な性格として描かれており、原作のタイトルにオバサンと付けられているのは、日系カナダ人のエスニシティならびに世代間の複雑さが象徴されたものだと思います。

物語は、1972年に小学校の教師をしている36才の主人公ナオミが、お世話になったイサムおじさんが亡くなったのをきっかけに、自らの半生を振り返ることから始まっています。戦前ナオミはバン

クーバーでも特に環境の良い住宅街において、両親と兄スティーブンの四人家族で何不自由なく暮らしていました。父方の祖父（ナカネのおじいちゃん）は腕のいい船大工で、母方の祖父（カトウのおじいちゃん）は医者でした。また、ナカネのおばあちゃん、カトウのおばあちゃんという両祖父母、父の兄であるイサムおじさんとその連れ添いのアヤお婆さん、母の妹であるエミリーお婆さんという親戚に囲まれ、幸せな日々をナオミは過ごしていました。

母とカトウのおばあちゃんは、1941年9月に当時5才だったナオミや家族を残し、ナオミからすると曾祖母の看病のため日本へ旅立ちます。その数ヵ月後の12月に日本とカナダが交戦状態になり、日系カナダ人すべてが敵性外国人とみなされ、それまでの幸せな暮らしが一変してしまいます。また、未だ日本にいた母とカトウのおばあちゃんとナオミは音信不通になってしまいました。その後バンクーバーのヘイスティングス・パーク強制収容所を経て、ナカネのおじいちゃんとおばあちゃんはニューデンバー強制収容所へ、カトウのおじいちゃんとエミリーお婆さんはトロントへ、アヤお婆さんとスティーブとナオミはスローカン強制収容所へ、父とイサムおじさんは強制労働へいくことが政府から強要されてそれらに従いました。その後、ナカネのおじいちゃんとおばあちゃんはニューデンバーの病院で亡くなり、強制労働から帰って来てスローカン強制収容所で久しぶりに一緒にナオミ達と暮らしていた父は肺結核を患い、ニューデンバーの病院へ移されそこで亡くなってしまいます。

1945年に終戦を迎えましたが、カナダ政府は日系カナダ人が西海岸に戻ることを禁止し、ロッキー山脈より東に行くか、日本に帰るかの選択を迫りました。イサムおじさん、アヤお婆さん、スティーブン、ナオミ達はアルバータ州、グラントンへ移り住みました。イサムおじさんはシュガービート労働者として働き、ナオミ達も収穫期など忙しい時期には学校を休んで手伝いをし、多感な成長期を過ごしました。物語はそこでナオミの回想から一転し、イサムおじさんが亡くなった1972年の現実に戻ります。イサムおじさんの葬式やアヤお婆さんの今後の身の振り方を家族が考える中、エミリーお婆さんは、ナオミが36才という立派な大人に成長したことを踏まえて、ナオミの母とカトウのおばあちゃんの情報についてずっと隠し続けてきたことを告げる決意をしました。それはカトウのおばあちゃんから来た二通の手紙でした。それによると1945年の8月に親戚の出産を手伝うために、ナオミの母と自分は長崎にいてそこで原爆に被爆したということが綴られていました。自分はなんとか助かったが、ナオミの母の行方が分からなくなり、数日間探し続けやっと見つけ出した時には、鼻はそげ落ち、片方の頬がほとんどなくなり、髪の毛はすべてなく、無数の傷口にはウジ虫がわいている状態でした。医者からは当初見放されましたが、奇跡的に一命を取り留め、その後は顔の傷を隠すため布のマスクを付けて暮らし、子どもたち（スティーブとナオミ）だけには知らせないでカトウのおばあちゃんに言い続けていることが書かれていました。当時、エミリーお婆さんがナオミの母に手紙を出しても返事はなく、その後ナオミが高校生の時にナオミの母はすでに他界し墓が東京にあるのを知っただけでした。被爆の後遺症に苦しんでいたカトウのおばあちゃんとナオミの母がいつ亡くなったのか誰も正確には分かりませんでした。

このような悲惨な最期を遂げた母とカトウのおばあちゃんにナオミは思いをはせながら、先月イサムおじさんと一緒に来て、風で草の影がさざ波となっている草原を坐りながら眺め、いつもおじさんが口癖のように言っていた「海のように……」という情景を思い出す場面で物語は終わっています。

内容はフィクションですが、Kogawaの体験を基に書かれているため、むしろフィクション化されたことによって単なる個人の特異な経験ではなく、当時の日系カナダ人の共通の思いを代弁するものに作品の内容が昇華されたと思います。「戦争の悲惨さ」「平和の大切さ」「人種差別の醜さや愚かさ」「家族愛の深さ」…など、色々なことを考えさせてくれる作品です。また、幾多の逆境にも負けず、たゆまぬ地道な努力の結果カナダに根を下ろしていった日系カナダ人のたくましさには元気づけられます。他にも多数の日系カナダ人に関する書籍を紹介します。興味のある学生は研究室（4-308）に寄ってください。

Would you like to go to Canada to visit your sister?

John Armstrong

Visiting Professor from Selkirk College

(本学客員教授)

This summer, six Aichi Konan College students spent three weeks speaking English, enjoying new activities, and making friends as part of the Summer Program at Selkirk College in Nelson, a small city in the mountains of British Columbia, Canada. At the end of August, three more students travelled to Canada to study for four months in the intensive English Language Program at Selkirk College in Castlegar. How did these students from Aichi Konan College in Japan decide to go all the way to Canada to study at Selkirk College? The answer is that our two colleges are “sister colleges” and we have been working together to provide international programs for twenty years.

In the late 1980s, Japanese colleges were trying to provide opportunities for their students to participate in international English language and cultural exchange programs. Canadian colleges, especially those in British Columbia, were trying to internationalize their campuses by inviting international students to study in Canada. People in Japan and Canada wanted to develop closer ties with people from other Pacific Rim countries.

Teachers from Konan College and Selkirk College decided to work together to offer an English language and cultural exchange program in Canada. On an early summer day in 1988, Selkirk College welcomed thirty students from Konan College and their accompanying teachers to the Grand Forks campus. Our first Summer Program had begun, and the long term relationship between our two colleges was beginning too.

That first Summer Program was a great success and since then there have been many more. Over twenty years, many Konan College students have learned to really communicate in English as they have enjoyed the summer in the welcoming small cities of Grand Forks, where the Summer Program was first held, and Nelson, where it is located now. They have shared their own Japanese culture and they have enjoyed Canadian nature through many activities like river rafting, golf, and hiking. They have made new international friends with their Canadian host families and the Selkirk College staff members. At the end of the program, it is difficult to say goodbye, but summers like these are never forgotten.

In 1993, Konan College invited a Selkirk College teacher to come to Japan to teach English. I was very happy to be the first visiting professor from Selkirk College fifteen years ago. Since then, many other Selkirk College teachers, with their families, have enjoyed this wonderful opportunity to teach English and experience life in Japan. It has been very rewarding for us to

live in Japan for a year, to get to know our Japanese students and share Canadian culture with them, and to develop close ties with our colleagues here at Aichi Konan College. In this way, we have tried to bring a part of Canada to Japan.

In 1998, Konan College began to offer First Year students in the Liberal Arts Department a special four-month Study Abroad (*ryugaku*) semester at Selkirk College. These students join the intensive English Language Program at the main campus in Castlegar, studying and making friends with international students from countries such as Korea, China, Taiwan, Mexico, Chile, and Switzerland as well as French-speaking Canadian students from Quebec. Students come back to Japan with new language skills and a new international perspective.

Some Konan College students have returned to Selkirk College after graduation in Japan to continue to study English for a year or more. A few have gone on to other programs and other Canadian colleges and universities. Yuriko Igami, one of the very first Summer Program students, completed a University Bachelor's Degree in Alberta. Kumi Sakai studied Early Childhood Education at the College of the Rockies and now works in a child care centre in Canada. Mayu Goto studied art and design at the Kootenay School of the Arts in Nelson. These three Aichi Konan College graduates have become very confident communicating in English and living in a different culture. They have really become international citizens in our global community.

From our first Summer Program in 1988, our sister college relationship has grown, thanks to the leadership shown by President Yasuda, President Tsuge, President Kishi, and President Nakata of Aichi Konan College and by President Perra and President Luscombe of Selkirk College, thanks to the vision and dedication of many faculty and staff members, and thanks to the enthusiasm and success of our students.

Over the past twenty years, our sister college relationship has brought many people together in Japan and Canada. How will our special international friendship continue to develop in the next twenty years? What new international learning opportunities can we offer in the future?

Since 1988, the students, teachers, and staff of Aichi Konan College and Selkirk College have made a small but significant contribution to the shaping of communication and understanding in our international world. Let us continue! Can our sister college relationship help you reach your goals?

姉妹に会いにカナダへ来ませんか？(アームストロング先生のメッセージの要旨)

この夏6人の江南短大の学生たちが、カナダ・ブリティッシュコロンビア州の小さな町ネルソンでセルカーク・カレッジが開催する夏期語学研修に参加しました。8月の終わりには、セルカークのESL(留学生のための英語教育プログラム)で4か月学ぶため、3人の江南生が同じくセルカークのキャンパスに到着しました。どうしてはるばるそんなところまで行くのかって？セルカーク・カレッジと愛知江南短大は姉妹校なのです！

日本の大学や短大が学生のために語学学習や異文化交流をおし進めようとしようとしていた1980年代、カナダ、特にブリティッシュコロンビア州のカレッジも留学生を積極的に受け入れようとしていました。

双方の努力が実り、1988年に初めて江南短大の学生たちと引率の先生方がグランドフォークスで行われた最初の語学研修に参加しました。両大学のその後の長い交流の幕開きでした。

最初の夏期語学研修は大成功で、その後20年にわたり江南の学生たちは語学学習だけでなくカナダならではのさまざまな異文化体験を通じ、忘れがたい思い出を作り、現地の人々との絆を深めてきました。開催地もネルソンが加わって1時期2箇所に分かれ、2000年からはネルソンだけになりました。

1993年からセルカーク・カレッジの先生が次々に江南短大で客員教員として教えるようになりました。15年前私は運よくトップバッターとして江南に赴任し、英語を教えるだけでなく得がたい異文化体験をしました。家族とともに1年間日本に滞在することは、お互いの文化を学びあい、両大学の絆を深めるまたとない機会でした。

1998年には教養学科で「カナダ4か月留学」が始まりました。キャッスルガー・キャンパスで行われるESL(外国人のための英語学習プログラム)において、アジアやヨーロッパなど各国の留学生に混じって秋学期の4か月間英語を学ぶのです。参加者はたしかな語学力とともに広い視野を得られます。

セルカーク・カレッジで学んで帰国後またカナダに戻ってくる江南の卒業生がいます。その中で **Igami** さんという人はアルバータ州の大学を卒業し、**Sakai** さんはカナダで幼児教育を学び、カナダの保育所で働いています。**Goto** さんは美術デザイン学校に進学しました。英語力を身につけ国際人となってそれぞれの道に精進しています。

1988年最初の夏期研修以来両大学の関係は、安田、柘植、岸、中田先生ら江南短大の代々の学長と、セルカークのペラ、ラスカム両学長のリーダーシップのもと、次第に強固になっていきました。両カレッジの交流は、プログラムにかかわってきたすべてのスタッフや学生の皆さんの熱意や努力に支えられて、充実したものになっていったのです。



過去20年間江南短大とセルカーク・カレッジは、姉妹校として友好的な関係を維持し発展させてきましたが、今後はどうなるのでしょうか？

国際化が進む中、1988年以来私たちは、ささやかではありますが緊密なコミュニケーションや相互理解のための努力を続けてきました。これからもこの関係を維持していきましょう。あなた方の目標達成のために、姉妹校提携が何らかのプラスになることを願って！

(文責・伊藤洋子)

カナダ4か月留学に参加して

津田 菜月 （ 教養学科・現代キャリアコース・卒業生 ）

私は二年前、カナダ4か月留学に参加しました。私にとって初めての海外経験で、まして4か月もの間家族と離れたこともなかったので不安なことがたくさんありました。しかしそれ以上に、英語が好きでもっと上達したいという気持ちや新しい世界を経験できることへの興味でいっぱいでした。

カナダで過ごした4か月間は本当にあっという間に過ぎてしまいましたが、今でも昨日のこのように思い出すことがあります。大変なこともありましたが、振り返るとすべてが大切な思い出だと胸を張って言うことができます。

特に心に残っているのはセルカーク大学で過ごした時間です。もちろん本場の英語を学べる楽しさもありましたが、世界中から来ている留学生達と友達になれたことがとても嬉しかったです。一緒に勉強することでやる気も増しました。特に韓国からの留学生と仲良くなり、お互いの文化を教えあったり韓国料理を作ってごちそうしてもらったり、日本ではできない貴重な経験となりました。

大学の行事の中でインターナショナルフェスティバルという、出身国ごとに留学生が集まって自分たちの国の文化を紹介したり食べ物を作って食べあったりするイベントも忘れられない思い出です。私たち日本チームは書道を紹介しようということで、他の留学生の名前をひらがなや漢字で書いてプレゼントしました。喜んでもらえて私まで嬉しい気分になりました。お好み焼きなども作りました。材料を集めるのは大変でしたし、みんなの口に合うかどうか不安でしたが「おいしい」と言ってもらえることができ、頑張ってよかったと心から思いました。

クリスマスパーティではみんなで歌や踊りの発表もしました。言葉がうまく通じず練習が大変な時もありましたが、とても盛り上がってすばらしい時間を過ごすことができました。

ホームステイ先の家族もとても親切な人たちで、すぐにやさしく受け入れていただきました。一緒に食事をしたり、買い物に行ったり、映画をみんなで観た事は楽しい思い出です。本当の家族のように大切にしてください、とても感謝しています。学校が休みの日には、朝早起きしてホストマザーと一緒にマラソンをしました。近くにある湖まで走るのですが、自然が豊かで空気もとてもおいしかったです。通り道の木になっている果物をそのままとって食べたりもしました。日本ではとてもできないことで、大自然を身近に感じました。



以前私は人と話すことがあまり得意ではありませんでしたが、帰国してからはいろいろな人とたくさんのお話ができるようになりました。カナダで経験したことは私の大きな財産となり、今後の生活においていろいろな形でプラスになると確信しています。

カナダでのことを思い出すたびに、再びカナダに行きたくなります。社会人として働く今、それは簡単なことではありませんが、留学中にお世話になった先生方やホストファミリーに会うことを楽しみに、これからも毎日頑張っていきたいと思います。

カナダ語学研修の思い出

大角 佳哉（ 教養学科・国際教育コース2年 ）

カナダ研修に参加し、外国で生活するという貴重な経験を通していろいろなことを感じました。

自分の思っていることがうまく言葉にならず、単語になってしまったり、会話が途切れてしまうことが多々あり、日本では会話で苦労したことがなかった私にとってとても悔しくじれなかったです。ふっと、障害をもっている方はこんな気持ちで毎日をすごしているのかなと考え、勉強すれば言葉が通じる私はやらないからできないのであって、贅沢でわがままだなあと思いました。

生活面では、初めてのホームステイなのでとまどうことばかりでしたが、カナダの人はみなやさしい方ばかりで、ホームシックになることはありませんでした。

町では知らない人でも笑顔であいさつしてくれ、困っていると快く助けてくれるカナダの人たちに触れて、人種や文化のちがいで差別しない雰囲気がとても好きになったし、日本もこんな風になってほしいと思いました。

私がびっくりしたことは、普通に車に乗っていると野生の動物の姿が見え、リスにえさをあげることもできたことです。日本ではありえないようなことが体験でき、自然にあふれているカナダはおどろき話に出てくるようなところでした。

学校の授業やアクティビティなどはとても楽しく、カナダに行かなければ絶対体験できないようなことがたくさん経験できて本当に良い思い出になりました。

私にとってカナダ研修は、日本でできないことを体験し、日本で普通に暮らしてはわからなかったことを学んだり、考えたりすることができた貴重な場でした。旅行という形で行っていたら味わえなかったことが、ホームステイすることによって経験できて、本当によかったと思います。



3週間という短い期間でしたが、他学科の子たちとも仲良くなれて、本当に参加してよかったと思っています。

カナダで体験したこと

堀場 愛可（ 教養学科・国際教育コース2年 ）

私は語学研修で、カナダ・ブリティッシュ・コロンビア州のネルソンというところに3週間行きました。カナダについて何も知らないので、出発前どんなところなのか、何が要るのかなど去年参加した先輩にたくさん質問しました。初めての海外なので、英語や食事、生活習慣などとても不安でした。

でも実際カナダに行ってみるととてもいいところでした。日本にはない自然に囲まれたところで、見とれてしまうほどでした。家の前に湖が広がっていたり、自然の中に建っている感じの家もありました。自然の中で楽しむ遊びがたくさんあり、いろいろな体験をしました。登山、カヌー遊び、ゴルフ、温泉など日本ではなかなかできないことをたくさんしました。

食事も戸外でバーベキューをしたり、自然の中で楽しむ食事は格別おいしかったです。日が長くて、夜いつまでも明るいので、夕食なのに昼ごはんを食べているように感じることがありました。

ネルソンの人々はとてもやさしく、分からないことを聞くと丁寧に教えてくれました。知らない人も、町で道がわからなくてたずねると、分かるように簡単な英語にして教えてくれました。

見学したカナダの幼稚園では周りにたくさんの自然があり、遊具や教材も素材が自然のものが多かったです。おもちゃは全部木で出来ていて、子どもたちにとってもいいと思いました。歌を歌いながら集合したり、次の活動に移るときも歌を使ったりしてとても楽しそうでした。おやつは、お菓子でなく果物と野菜で、体によいと思いました。また、子どもたちは自分で使ったお皿は自分で洗っていました。日本でも、自分で出来ることはもっと子どもにやらせるほうがいいと思いました。子どもの英語はよくわかりませんが、楽しく一緒に遊ぶことができました。みんなすごくかわいい子たちばかりでした。



初めカナダに着いたころはすごく緊張していましたし、慣れない生活で大変でしたが、慣れるにつれてすごく楽しくなり、今ではまたカナダに行きたいと思っています。初めて行った外国がカナダで本当によかったと思うくらい、楽しかったです。

他学科の子たちとも仲良くなれて友達が増えました。またみんなでカナダに行けたらいいなと思います。

カナダと私 — 新しい出発へ —

弓削 春佳 (教養学科・国際教育コース2年)

私は去年カナダ語学研修で初めてカナダへ行きました。私たちがホームステイしたネルソンは小さな町ですが、本当に自然があふれていてとても素敵なところでした。

でも自然に恵まれている分、不便なこともありました。日本だと蛇口からどれだけでもお湯を出すことができます。でもネルソン付近はお風呂用の水は給水ポンプにためて使うため、使える量が決まっています。湯船いっぱいのお湯につかるというわけにはいかないことがあるのです。お風呂に入る習慣もあまりないようで、ホームステイ中毎日お湯のことを気にしてシャワーを浴びていました。

カナダでの毎日はすべてが良い思い出ですが、一番楽しかったのはホストファミリーと過ごした時間です。週末はキャンプに出かけたり、川にピクニックに行ったりと楽しませてくれました。そして何より本当の家族のように接してくれたことが、本当にうれしかったです。いつも体調や気分を気にかけてくれて、寂しくならないよう、わかりやすい文と単語で話しかけてくれました。

初めは食事、言葉の壁、生活習慣がちがう家で本当に3週間も生活できるのだろうかと不安でしたが、そんな心配をする暇がないほど毎日が充実していました。



私は今回のカナダ研修を終えて改めて英語の重要性を感じ、もっとスキルアップしたいと思うようになりました。カナダで養った力を持続させさらに向上させようと、帰国してから、高校時代のテキストや英会話のラジオ講座を欠かさず聞いたり、少しずつでも勉強しなおすことにしました。今も続けています。さらに短大卒業後、英語を学ぶために語学留学することにしました。次にカナダに行くときはもっと話せるようになって、ホストファミリーを驚かせたいと思っています。

私にとってカナダは日本で体験できない思い出を作ったところでもあり、新しい目標を持つきっかけになった場所なので、本当に行ってよかったと思っています。

新入生図書館ガイダンスアンケート

本年度の新入生図書館ガイダンスを、5月16日から5月23日の間に各学科・コース毎に行いました。ガイダンスでは、貸出・返却や本館蔵書のコンピューター検索、DVDなどの映像資料の閲覧など図書館の使い方、図書館の本はどのように並べられているのか、どうやって本を探せばいいのか、また、各学科のレポート作成などに役に立ちそうな資料と置いてある場所を紹介しました。

ガイダンスの際に行ったアンケートの結果をご報告いたします。

(複数回答可の質問のパーセンテージは、回答者数229人に対するパーセンテージです。)

問1. あなたはこの図書館でどんな目的で
時間をすごしたいですか？(複数回答可)

	件数	%
1 本を読む	134	59%
2 新聞を読む	13	6%
3 雑誌を読む	134	59%
4 古い新聞の記事を調べる	15	7%
5 映画(DVDやビデオなど)を見る	177	77%
6 図書館の資料を使って勉強や調べものをする	98	43%
7 図書館の資料は使わず勉強をする	9	4%
8 ほっとするため・ほっと物思いにふける	43	19%
9 待合わせ	6	3%
10 その他	5	2%

問2. あなたは一年で何冊くらいの本を読みますか。

	件数	%
1 読まない	30	13%
2 1～2冊	88	38%
3 3～5冊	50	22%
4 6～10冊	27	12%
5 10～20冊	15	7%
6 20冊以上	19	8%
無回答	0	0%
合計	229	

問3. 新聞をテレビ欄以外(社会欄・経済欄など)にも
目をとおして毎日読みますか。

	件数	%
1 はい	37	16%
2 いいえ	191	83%
無回答	1	0.4%
合計	229	

問4. あなたがいろいろな情報を知るのに役立っているものに、
いくつでも○をつけて下さい。(複数回答可)

	件数	%
1 テレビ	222	97%
2 ラジオ	34	15%
3 親・先生・先輩との会話	113	49%
4 友達との会話	161	70%
5 携帯電話	154	67%
6 インターネット	148	65%
7 新聞	74	32%
8 雑誌	153	67%
9 各種の掲示	25	11%
10 映画やビデオ	70	31%
11 本	77	34%
12 CD	59	26%
13 その他	1	0.4%

問 5. あなたは中学・高校時代に学校図書館を
どの位使っていましたか？

	件数	%
1 ほとんど毎日	8	4%
2 週に3日くらい	19	8%
3 週に1日くらい	22	10%
4 月に2,3回	36	16%
5 年に2,3回	79	35%
6 今までに1度だけ	12	5%
7 ない	53	23%
無回答	0	0%
合 計	229	

問 6. あなたは中学・高校時代に公共図書館を
どの位使っていましたか？

	件数	%
1 ほとんど毎日	4	2%
2 週に3日くらい	6	3%
3 週に1日くらい	12	5%
4 月に2,3回	32	14%
5 年に2,3回	85	37%
6 今までに1度だけ	17	7%
7 ない	71	31%
無回答	2	1%
合 計	229	

問 7. 今日のガイダンスでこれから役に立ちそうなことは
どんなことですか。(複数回答可)

	件数	%
1 図書館の本のならば方・探し方	139	61%
2 コンピューター検索の方法	73	32%
3 百科事典類	23	10%
4 新聞縮刷版	25	11%
5 各種白書・統計・年鑑類	20	9%
6 そのほかの調べものの本	74	32%
7 その他	10	4%

問 8. 読んでみたい本、見たい映画、あるいは興味がある分野、
好きな作家がありましたらお書き下さい。

	件数	%
記入者数	133	58%
無記入者数	96	42%
合 計	229	

問 9. 愛知江南短期大学の図書館に対するご希望をお書き下さい。

	件数	%
記入者数	40	18%
無記入者数	189	83%
合 計	229	

問 10. 今日の図書館の利用者ガイダンスの感想をお書き下さい。

	件数	%
よかった、わかりやすかった、など良い感想	164	72%
その他の感想	2	1%
無記入者数	63	28%
合 計	229	

*** アンケートを集計して ***

あなたは図書館でどんな時間をすごしたいですか？今回のアンケートでは、映画鑑賞をしたい！という声が一番多かったです。お友達同士で映画を見て盛り上がったり、1人じっくりと見たかった名画を見たりして感性を養ってください。希望が多かった、「クローズZERO」「恋空」「親指さがし」「ラブ・コン」などは早速、図書館に用意しました。図書やコミックの希望も、好きな作家などを参考にして揃えました。図書館では、今回のアンケートだけでなく、本やDVDのリクエストも受付けています。図書館の地球儀の横にリクエストBOXが置いてあります。ご希望がありましたら、リクエストBOXのそばにある申込書に希望の本やDVDを記入して入れてください。

また、雑誌を読みたいという回答が、本を読みたいという回答と同じくらいありました。今回、各学科・コースのレポートの作成などの課題に特に役立つ雑誌を紹介しましたが、「これから役に立ちそう」という感想が多かったです。本館では、雑誌も最新号以外は貸出しをしています。「CAN CAN」や「SPY MASTER」などのファッション雑誌もありますので、勉強の息抜きに読んでください。

図書館の資料を使って勉強や調べ物をするという回答も多く、問 10 にも「勉強する意欲が上がった。」「これから利用していきたい。」という感想がたくさんあり、これからの学習に役立てていただければうれしいです。また、「わかりやすかった」、「図書館を使いやすくなった」、「よかった」、という感想がたくさんあり、これからも皆さんのお役に立つようなガイダンスを実施していきたいと思います。ありがとうございました。

今日のガイダンスでこれから役に立ちそうなことはどんなことですか。という問 7 には、「図書館の本のならば方・探し方」が多かったです。これまで、コンピューター検索ができて本を見つけられなかった人も多いかと思いますが、これからは本学の図書館だけでなく、どこの図書館でも同じような方法で本を見つけることができます。

一年に読む本の冊数は、多い人も少ない人もいますが、少しめくってみる位の軽い気持ちで、図書館の本や雑誌をできるだけたくさん手にとってみてください。心に残る言葉や、これから役に立つ知識に出会えるかも知れませんよ。もし探したい本やレポートなどの資料が見つけられない時には、気軽に質問してください。時間がゆるす限り、できる限りサポートします。ただし、レポートなどのための参考資料の質問は、提出期限ぎりぎりではなくできるだけ早めに来てください。

図書館の本と映像資料の紹介

「カナディアン ロッキー」 ダグラス・レイトン写真 アルティテュード出版社

カナディアンロッキーの雄大な山々や美しい河や湖、そこに生きる野生動物たちの写真集です。カナダの澄み切った空気や、光のきらめきまで感じられる生命力あふれる美しい写真が満載です。

「赤毛のアン」 ルーシー＝モンゴメリ著 村岡花子翻訳 ポプラ社

そばかすだらけで燃えるような赤毛の少女、11 才のアン＝シャーリーは孤児院からグリーンゲイブルスのマシュウとマリラ兄妹にひきとられます。マシュウとマリラは農作業の手伝いをしてくれる男の子をひきとりたかったのですが、手違いでアンがやってきたのです。活発で空想力豊かなアンが、美しいカナダの自然のなかで、わくわくするような体験やさまざまな失敗をしながら成長していく様子が生き生きと語られています。

カナダで「赤毛のアン」が出版されてから今年で 100 年目です。アンのふるさとのプリンスエドワード島では生誕 100 周年にちなんで、様々なイベントが行われたそうです。

「赤毛のアン」には「アンの青春」「アンの愛情」「アンの幸福」... と続編があります。アンが聡明で魅力的な女性へ成長し、ギルバートと結婚し家庭を持つ様子が描かれるシリーズです。本館所蔵のレーザーディスク「続・赤毛のアン」は続編の「アンの青春」が映画化されています。

赤毛のアン	高畑勲 監督 宮崎駿 構成	劇場版ビデオ	V-234	100 分
赤毛のアン	ケヴィン・サリヴァン監督	レーザーディスク	L-185	141 分
続・赤毛のアン	ケヴィン・サリヴァン監督	レーザーディスク	L-217	165 分

映画：鑑賞者数ランキング (平成20年4月1日から9月1日まで)

タイトル	利用者人数	順位
クローズ ZERO	86	1
レミーのおいしいレストラン	52	2
恋空	47	3
親指さがし	44	4
ボイス	34	5
マリと小犬の物語	31	6
ラブ・コン	30	7
悪魔の棲む家	28	8
箆笥	28	8
パイレーツ オブ カリビアン 3	26	10
リロ アンド ステイッチ 2	23	11
ピーターパン 2	20	12
ライオンキング	19	13
シザーズハンズ	16	14
チャイルドプレイ 2	16	14
いつでも会える / 君のためにできること	14	16
ナイトメアビフォアクリスマス	14	16
ハイドアンドシーク	14	16
愛しのローズマリー	13	19
サイレントヒル	13	19
マリーアントワネット	13	19
リロ アンド ステイッチ	11	22
アラジン	11	22
チャイルドプレイ	11	22
ホテル・ルワンダ	10	25

今年はホラーと感動系が人気です。最近の新着では、「アダムス・ファミリー 2」もあります。図書館の AV ルームでは、4月に待望の大型液晶テレビを購入しました。10人位までいっしょに見ることができますので、鮮やかな大画面を皆さんで楽しみ下さい。